

「桜の鏡」に見る生物多様性保護と日本社会の発展変遷

—阿部 菜穂子『チェリー・イングラム 日本の桜を救ったイギリス人』を読んで

北京大学 王敬淇

平安時代後期の僧侶で詩人、西行は、桜を心の中の菩提と見立て、和歌にこう詠んでいます。

願わくは

花のしたにて 春死なん

そのきさらぎの 望月の頃¹

イギリスの園芸家、鳥類学の専門家、桜守、そして同書の主役であるコリングウッド・イングラムは、花盛りの桜を見たときの気持ちを次のように日記に綴っています。

私はそこに長い時間座り込み、美しい景色がゆっくりと自分の魂に染み込んでいくのを、ただ感じていた。²

桜は日本の民間で公認されている国花で、この民族の「美」に対する感知と体感が凝集しています。桜は国境を越えて、生まれは清浄、咲けば熱く、舞い散るさまも絢爛な姿は世界各地の春に書き込まれてもいます。世界の人々が生物の美、自然の美を鑑賞する暗黙の了解と共通認識を凝縮しているのです。しかしこの美の精霊も、かつて日本社会の発展や変遷の影響を受け、品種多様性が急激に減って、多数の品種が絶滅の苦しみに瀕したこともあります。

日本のジャーナリストでドキュメンタリー作家の阿部 菜穂子が著した『チェリー・イングラム 日本の桜を救ったイギリス人』は、英国の桜愛好家コリングウッド・イングラムの一生から始まり、英日両国における伝播史、保護史を記録しています。同書では第4章で日本の桜の歴史について整理されています。桜の保護史は生き生きとした日本社会

¹ 『チェリー・イングラム 日本の桜を救ったイギリス人』、阿部 菜穂子（著）、張秀梅（訳）北京、社会科学文献出版社、2021.8. pp129-130

² 『チェリー・イングラム 日本の桜を救ったイギリス人』、阿部 菜穂子（著）、張秀梅（訳）北京、社会科学文献出版社、2021.8.p65

の発展史でもあると言えます。

日本列島の人々が農耕民族として定住して以来、桜はこの民族に寄り添って成長してきました。桜の繁殖の構造は独特で、遺伝子の異なる株の間でしか受粉できません。そのため野生の桜は木ごとに少しずつ違いを持つようになり、原生の多様性が作られました。いにしへの日本の農民は山の神が稲を見守るため桜の花弁の間に身を寄せていると考えていました。桜の開花は人々が田植えを始める合図で、桜が次第に原初の村落共同体のシンボルと民間信仰の対象になっていったことは、人と自然の質素でロマンのある交流を体現しています。9世紀に入ると、日本民族の主体性が次第に目覚めるにつれ、日本人は中国文化の受け売りを抜け出したいとますます切に求めるようになりました。桜をその新たに目覚めた民族のシンボルに選び、日本人の桜に対する愛がより強く深くなったのです。桜はますます貴族に愛され、植え付けが絶えず広がり、栽培品種も増え続けるようになりました。桜の植栽は江戸時代に全盛期を迎えています。

19世紀の中葉から末にかけて、この局面に巨大な変化が発生しました。この時期、日本社会には史上かつてない揺れ動きと変革がありました。西洋人が「近代化」の潮流をひっさげて日本に開国させたため、桜は巨大な衝撃を受けたのです。イングラムが日記に無念さを綴ったように、西洋の建物、景観が日本を席卷するにつれ、日本社会は本来の審美の味わいを失って、何種類もの桜を鑑賞する気長でのどかな趣を失い、花の華麗さだけに熱中するようになりました。それと共に、商業主義の波により、多くの品種は需要量が小さく、成長周期が長いと、不経済だとして市場で淘汰されていきました。明治政府も新しい時代の都市の景観を築こうと焦り、成長の早いソメイヨシノを大規模に普及させたため、他の品種は次第に見られなくなっていったのです。

この景観の形成は、日本の軍国主義化する過程とほぼ同時に進んでおり、桜は多種が共存し、開花が連綿と続き、順番に生長するものではなく、同時に開花し、瞬時にすべて落下するという特徴がちょうど軍国主義の精神の核心に呼応しました。この時期、桜を鑑賞する焦点はもうその生命力と開放ではなく、舞い散る方に移っていました。優れた人物は桜が舞い散るように未練なく国のために命を捨てるべきだという、滅びを標榜した「桜の意識形態」が次第に形成されていったのです。

日本社会の変遷につれて急激に悪化する桜の生態には憤慨せざるを得ません。その中で種の保護の行動を貫くというのは、格別に慧眼であり、感動します。イングラムは桜の生

態の日本における変遷を目にして、何度も桜の多様性に危険が迫っていると警告しました。

『チェリー・イングラム』では、イングラムの生涯という視点から、桜を愛する人々による、桜の多様性を保護するための努力が述べられています。遠い海を越えた一株一株の桜の接ぎ木から、イングラムが稀少な品種を保存するため大陸の別の岸に「桜博物館」を建てるまで。桜の会と多くの日本の学者が権力を独占する波の中で、冷静さを保ち桜の多様性のために公正に主張するところから、荒川堤にソメイヨシノを植栽することに反対し、78種のサトザクラを残すところまで。生物多様性の保護に対する大先輩の鋭さと責任感には嘆息させられます。

本文のテーマに「桜の鏡」という比喻を採用したのは、桜の生態の変化と保護の歴史が、生き生きと日本の政治、経済、社会、思想、文化など多方面での変遷を反映している、日本民族の別種の発展史だからです。前文をまとめて感じられるのは、ある国がその土地に生息する動植物に対応する様子から、その国がどのように自らの価値を定義し、自らの伝統を評価して発展の道を選ぶかどのように自らの価値を定義し、自らの伝統を評価して発展の道を選ぶかが見えるということです。では、生物多様性の保護を国家の発展と結び合わせると、また心社会の変遷によるマイナスの影響を警戒し、そのものの規則に従って、自然の独立した地位を尊重するということになります。同時に、生物多様性の保護が国境を越えるという一面も見られます。それは人々の生物の美、自然の美に対する心からの愛です。そうした愛は功利に関係しない審美的活動や精神的享樂であり、動植物の命に向き合ったときの拭えない「忍びなさ」であり、それでこそ桜を愛する人々が手を取り合って桜の多様性を保護する苦労があったのです。

記憶の中では、小学校から大学まで、私の成長してきたキャンパスすべてに桜の姿があります。春の日に、このとおり清らかで煌びやかに美しい桜を見ると、国境や種族を越えた生命の美、魂の深くで全人類と同じリズムを刻む拍動を感じるがよくあります。世の中に桜の多様な美しさが常にありますように。

参考文献:『チェリー・イングラム 日本の桜を救ったイギリス人』、阿部 菜穂子(著)、張秀梅(訳) 北京、社会科学文献出版社、2021. 8.